

矢田津世子

ショーウィンドーのマドンナ

写真・文 津島修三

（秋田市在住）

戦前の名古屋に、三國写真店という写真館があった。昭和七年ころ、その写真館のショーウィンドーに、知的な美しさを漂わせた若い女性の写真が飾られていた。その写真の女性が、当時十歳を少し過ぎた店主の息子が心ときめかしていた。彼の名前は一期。後年タレントとして活躍する三國一期だ。エッセイストでもある彼は、多くの随想随筆を著している。少年のころに見たその写真についても、
「この美しい女性が『小説家』であることを母から知らされたときの少年の私の驚きは、今も新たである。」
とエッセイで回想している。

写真の小説家の名は、矢田津世子という。明治四十年、秋田県五城目町の生まれ。父親の没後、戸主になっていた兄の転勤

に伴って、昭和二年より母親とともに名古屋で暮らしていた。文学青年であった兄の後ろ盾を受けて津世子は小説家の道を進むのだが、同時代を生きた林芙美子などには、彼女の名は今日さほど有名ではない。昭和十九年に三十六歳で病没という短い生涯が、作家としての大成を待ってはくれなかった。

しかし、昭和十一年発表の『神楽坂』はその年の芥川賞候補になり、いくつかの作品は映画化されるなど、戦前の人気作家の一人ではあった。私たち秋田人の目には、作品の中にしばしば秋田が描かれているのも親しみやすい。

秋田市から北の方へ、もの一時間も汽車に揺られてゆくと、一日市という小駅がある。ここから軌道がわかれていて、五城目という町にいたる。

という書き出しで始まる、実際にあった事件をモチーフにした『凍雲』という作品などは、私たちには懐旧談のように読み進むことができる。昭和九年に阿仁町の伯母の病氣見舞いに出向いた際の、鷹ノ巣駅で列車を待つ間の待合室風景をスケッチした随筆『鷹ノ巣駅』も、津世子の柔らかな温かいまなざしが読む者に心地よい。

矢田津世子はまた一人の作家としてやはり、「坂口安吾の恋人」として有名だ。安吾の二十七歳、三十歳は、まさしく津世子との出会いと別れを描いた作品だ。しかし、この恋で二人は幸せにはなれなかった。お互いの感情が行き違っただけの間に、お立ち、安吾は作品の中で、オモチャ売場の前でオモチャを買ってもらえない悔しさに駄々をこねている子どものような、繰り返すばかりを並べている。

津世子の美貌は、ときに彼女自身には災いであった。文学の師の一人であった川端康成は、

「矢田さんは幾らか男顔の美人で、体も立派であり、涼しい花木のやうに人目を惹いた。気位の高い少年じみた引きしまりがあった。」

と述懐しているが、安吾の不器用な愛し方然り、女を武器にして、文学者の階段を昇ろうとしたとか、あの人は妾腹の子だから……といった、事実ではない風聞も彼女にはつきまどった。そんな後ろ向きな津世子像が、作家としての過小評価と無関係ではないだろう。

最晩年に、津世子は同郷で十三歳年下の男性と親密な仲になる。何かと居心地の悪い生涯を送ってきた彼女が、最後のわずかな時間とはいえ、その男性の胸に自分の居場所を見つけたのは幸だった。

秋田の多くの図書館には津世子の複数の著作が収蔵されている。ゆつくりと時間をかけて、美しき秋田生まれの文学者矢田津世子と、向き合ってみたいと思う。



三國写真店は現在、「写真のみくに」という社名で中京地区の主だったホテルに写場を構える大手の写真スタジオになっている。その一つ、名古屋観光ホテル写真室のショーウィンドーに津世子の写真を「里帰り」させてみた。三國一期氏がこの写真に心ときめかせたのもうなずける。なお、右下の肖像写真は、津世子を撮った故三國庄次郎氏である